

産官学による医療的ケア児とその家族を中心とした 新時代の多職種連携

～新型コロナウイルス感染症が医療的ケア児と

その家族に与える影響を共有し、今後の課題について考えよう！～

看護学部・研究科

おおむら か よ こ ほんだじゅんこ やまぐちともこ ふじもとけいこ はやしちさと
○大村佳代子、本田順子、山口智子、藤本佳子、林知里

キーワード

多職種連携、地域包括ケア、在宅看護、小児看護、医療的ケア児

研究概要

医療的ケア児とは、人口呼吸器を装着している障がい児、その他の日常生活を営むために医療を必要とする状態にある障がい児のことを言います。

2019年12月から世界的に流行した、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、多くの学校が休校となり、病院では外来通院が縮小するなど、医療的ケア児を支える環境で大きな変化がありました。医療的ケアが必要な児童生徒の多くは、基礎疾患を有しており、通常学級の児童生徒と比べるとさらに厳しい感染予防対策が必要になります。特別支援学校やデイケアなどを利用できない場合、医療的ケア児を支える家族への身体的・精神的負担は増大します。我々の事前調査では、小児科の在宅医数が十分ではない中で医療を提供する体制上の課題や、学校現場での教職員自身の健康管理や感染予防のための環境整備に関する精神的・身体的な負担、教育・保育に携わる職員への感染予防に関する知識の不足、また、医療的ケア児の家族からは、感染予防物品の入手困難、感染に対する不安、休校が長引いたことによる心身の疲労についてなどが語られていました。これらの経験を踏まえ、多職種や他施設との情報交換の場や関係機関との定期的な研修や取り組みについてのニーズが高くなっていることが明らかとなってきました。平常時から医療的ケア児とその家族を支える医療、行政、教育現場の連携の必要性はクローズアップされていますが、それぞれの経験や課題を共有する場は十分ではありません。

そこで、本研究では、地域や医療機関でケアを担う医療従事者（医師、看護師）、行政職（保健師）、教育機関（教育委員会、教諭）、医療的ケア児の家族、それぞれの立場から、新型コロナウイルス感染症が地域で暮らす医療的ケア児とその家族に与えた影響について情報共有をし、現状と今後の課題についてディスカッションすることに取り組んできました。その取り組みの一端を紹介し、様々な多職種、施設、機関の協働・連携を強固なものにし、新型コロナ感染症という未曾有の経験から学びを共有する機会としたいと考えています。

アピールポイント

マスコミ等においてコロナ禍での日本経済の冷え込みが指摘されていますが、医療的ケア児に代表される在宅療養者では、必要な医療物品の入手が困難であることが語られていました。今後はICT技術や、新たな運搬技術等を活用し、災害時であっても、必要な物資を、必要な人に、必要なだけ届ける新たな物流システムの構築が必要となると考えます。このような社会の仕組みを創造するには、医学や看護学だけではなく、学際的な交流が重要であると考えます。世の中のニーズに対し、新たな視点でのご意見を頂ければ幸いです。